9. 明治社会主義者達の公園観

丸 山 宏*

The Concept of Public Parks for Japanese Socialists in Meiji Era.

Hiroshi MARUYAMA

摘要：西欧近代社会の産物である「公園」がわが国で馴化する一過程として、明治社会主義者達の抱く「公園観」を社会主義、都市問題、公共性という3つの視座から論述する。彼らは公園を社会主義イデオロギーの発露ととらえる。近代化の過程で都市問題は必然的に公共的領域をつくり出し、その具現化したものとして公園をみる。都市問題は社会主義（都市社会主義）によって解決されるものであり、その都市施設として公園があるとみる。

1. はじめに

公園に関する太政官布達を『東京日々新聞』第265号は布告された翌々日明治6年1月17日に「公園」として報じている。この記事に対して同紙第303号（M. 6. 2. 28）には次のような投書があった。

近頃上野山浅草寺等ヲ以テ上下遊観ノ地トナサレシト聞ク果メ然ラバ美事ト仰ゲベキ歟大都会ノ地殊ニ輦轂ノ下ニ一箇遊観ノ地モ無ク広漠自在ノ地モ無キハ不体裁且人民養生ノ助けヲ欠クトモ云ン乎…

この投書は公園についての最も早い時期の反響の一つであろう。投書主は公園を「上下遊観ノ地」であり「一美事」、「人民養生ノ助け」と了解している。

戦前、造園家西川友幸は彼の随筆集『庭を想ふ心』（昭和12年旺文社）の中で「公園の今昔」と題して就学前5.6才のころ叔父に連れて日比谷公園に行った時の思い出を記している。

……家に帰って、私は廻らぬ舌で云ったさうである。
「公園へ行ったけど、叔父さん、中へ入らなかったよ」
その当時（西川友幸は大正9年生れであるから大正14年頃）「公園」という言葉は余り普遍化されてゐない近代語だったかも知れない。……そして、私に説明したさうである。「あそこへは偉い人になってからでなければ入れないんだ」……叔父は公園へ入るのに入園料を払はなければいけないものだと思へてゐた。……（P. 37）

このエピソードはひとりの造園家の回想ではあるが、公園布達以来半世紀を経た大正末でさえ、まだ「公園」に対して社会的には十分な理解がされていなかったこと

を物語るものである。

前述の新聞の投書あるいは個人の回顧等様々なものから談叢として当時の公園観を拾い上げることは容易であり興味もある。また今日的問題として「公園」のあり方を探る上でも歴史的に公園観の変遷を把握することは必要であろう。しかし、漠然と公園観を列挙することはあまりにもその視点が多義多彩であり、好事家的である。多方面からの見方、そのプロセスにより、いわゆる世論の公園観が形成されてきたことは否めないが、ここでは焦点をしぼり、明治期の社会主義者達をめぐる問題として扱う。

明治20年代から我が国に紹介された社会主義はとくに日清戦争後急速な近代化にともない都市問題をその範ちゅうに入れる。明治期の社会主義者達は彼らの機関誌、著書に公園論として時には断片的に「公園」観、「公園」像を述べている。資料的には主として社会主義者達の機関誌であった『労働世界』『社会主義』『週刊平民新聞』『大阪平民新聞』等、それに諸個人の著書をその対象とする。特に、ここで機関誌を扱う意味は著書が「公園」論としてかまえたものであるのに対し、機関誌はプロパガンダとして大衆的広がりを持ち、彼らの「公園」観を見る上ではより卒直にあらわれていると考えられるからである。

2. 都市問題としての公園への視座

一 森鷗外・片山潜・安部磯雄一

鷗外を社会主義者に入れるのは異論のあるところである。しかし、小泉信三は「鷗外と社会思想」¹⁾の論文で、

* 京都大学農学部附属演習林

当時として鷗外の社会主義についての造詣の深さを矢野文雄著『新社会』の合評²⁾に見ている。鷗外がドイツ留学時に社会思想・社会主義に興味を持ったのは事実であり、また知識人として当然のことであろう。それ故、社会主義的理想国を描いた矢野のユートピア小説の浅薄さががまんできなかったのである。

鷗外は公園論というようなまとめたものは書いてはいないが、『屋制新議』(M.23.6)『衛生新篇』(M.30.6)等の中で公園についての記述が見られる。『衛生新篇』の「都市」の項ではこう述べている。

都会ノ周匝各所ニハ大公園ヲ設ケテ市民ノ遊歩ニ供スル外市内ニモ亦處々ニ小公園ト遊戯場トヲ開クベシ
欧米諸大都ノ所謂広場 Pläze ハ一ハ往來ノ安全ト交通ノ便益(市場)トヲ図ルニ在リト雖、一ハ実ニ此目的ヲ存ズ老幼歩ヲ遠キニ移スコト能ハザルモノハ皆コ
コニ遊ブベク亦大ニ市内ノ空氣ヲ清ムベシ但此広場ニハ歩徑ヲ布キ芝草ヲ植エ腰掛ヲ設ケ且並木ヲ作りテ蔭ヲ為スベシ³⁾

鷗外の医師としての目は都市の衛生施設として公園をとらえている。明治17年から明治21年まで満4年のドイツ留学は都市問題として公園を見ている。都市衛生からの視点は後述の片山潜・安部磯雄に共通するものであり、これは明治6年の公園布達文にはなかった視点である。

『社会主義』第7年第10号(M.36.4.18)の「海外の労働界」の欄に「英国都市社会主義の発達」と題する彙報がある。その中でロンドンの公園についての記述がある。「龍動市は又々ブロックウエル及びウ・オン・ヅウ・ースの二公園を新設せり、彼等常に曰く公園は市民の肺臓なりと以て如何に其の必要なるかを知るべし」⁴⁾ 記事はこの後ロンドンの下水道の問題、労働者家屋の建設の問題等々と続いている。ここにある都市社会主義は、Municipal Socialism の訳語で片山潜の著書『都市社会主義』(M.36)でその名が知られる。

片山潜は明治17年25才で渡米、明治29年帰国。明治27年8月に片山は夏期休暇を利用してイギリスの諸都市を訪れた。この間の旅行談をまとめて明治30年、『英国今日之社会』を著わしている。『都市社会主義』におけるほどもとまりはないが、彼の公園観としては『英国今日之社会』がよりわかり易い。

ブラクハンコモンは市立の一大囿園にして其築造は一種特殊なり即ち労働者の職業なき時に当て工事に着手し平時は之を中止す即ち世の不景気なる時は一丘を築き労働者職を失ふ時は一池を造る斯くの如く随時に出来し今尚成就せずビクトリヤパークも同様の組織にて築造されつゝあるなり⁵⁾ (P.83)

公園がいわゆる社会事業、失業対策事業に利用されていることに言及し、続けて公園の何たるかを述べている

凡そ公園の市街熱鬧の中央に設けらるゝは或は一般

衛生上より或は緊急避難の必要より其他種々の理由あるべしと雖とも公衆をして世の富豪家と同じく囿園を有して之を楽ましむるの精神に出づるも確かに其なるべし特に彼の下等賤民は日々営々として労働に職事し未だ嘗て自然の光景に沿し天真の妙趣を吸収して之に同化するの機会を得ず茲に於てか公園なるものあり日々逍遙して大に其美術的觀念を発起し温雅の心を誘致し随て崇高なる道念を養成せしむるにあり……(中略)……又公園には諸の遊戯場ありてフットボール、クリケット等備へらる而て年齢により区画を異にす即ち十四才までは彼處十二才迄は此處子守は何處何は何と決定せられ規律整然一糸乱れず特に其静境に至ては龍動市中忽ち深山幽谷に入の想あらむ老樹森々漠然たる谿流を覆ひ其間に舟を浮べ洵に気を養ひ神を清むるに足る⁵⁾ (P.83—84)

非常に詳細な観察を行っている。片山は日曜日の公園に出かけて次のように言う。

ハイドパーク、グリーンパーク、セントゼームスパークの三公園は中央政府の管轄に属すと雖とも其他は皆市会の所轄なり公園には数千の椅子あり以て風光を賞し新鮮の空氣を吸収すべし而してこの三公園に限り腰掛に椅る時は官服の吏員来て金二仙の請求を為す固より随意にして払ふことを欲せされは椅子を離れて逍遙するなり又一旦二仙を支払たる時は一の小切符を交付す此切符を所持すれば其一日は三公園何れにも適用し好む処の椅子は我物顔にて領するを得るなり龍動市にては公園地及明地を一小園としたるヲプンスペースは到る處所々にあるなり⁵⁾ (P.129—130)

随分詳しく観察している。

彼は帰国後、明治36年に『都市社会主義』を出版し、そこで第16章を「都市の公園」に充てている。冒頭には、パリ ロンドン、ベルリン、ウィーン等、欧米諸都市の公園面積と人口との比較表を掲げ、また有名な大公園の面積も載せている。ボードブローニ、パークドシヤモン、リゼンツパーク、ハイドパーク、ケンシントンガーデン等々。これに続けてこう述べている。

抑も市内公園は貧民の娯楽場なり。而して市のセーフティーヴァルヴ(Safety valve [安全弁]のことか)なり。公園の有無は市民公衆衛生に大關係を有せり。若し貧民の家借屋に住居するも、其の最近の所に公園を有し、此處に散歩して清鮮なる空氣を呼吸し以て其精神を慰め身体を静養するは、実に彼等に取りて必要なるものなり。⁶⁾ (P.170)

この後、その項目だけを上げると以下ようになる。紐育市の貧民窟と公園・日比谷公園・不忍池の不体裁・公園は貧民の客室なり・龍動市の公園と労働者・公園と音楽及美術・公園の取締・柏林市の公園・グラスゴー市の公園・公園の一目的は市民の教育にあり・動植物園と

図書美術館・公園を錢儲けの場所ならしむる可らず・公園の飲食品は市会が定価すべし・龍動の公園と貧民・公園遊戯の設備・龍動市会と公園。

片山は公園を都市問題の中で扱い、この都市問題は彼のいう都市社会主義によって解決できるものと考えている。片山の公園観は衛生問題・都市問題という実的な公園論にウエイトが置かれる。今日から見れば都市改良主義といった方が適切である。また彼の社会主義の限界もここにあるとよく言及されるところである。⁷⁾

片山潜と共に忘れてはならないのが安部磯雄である。彼はキリスト教的人道主義の立場から社会主義を唱えた人物である。彼もまた明治24年にアメリカに留学し、ベルリンに5ヶ月滞在、明治28年帰朝前にイギリスを訪れた。明治35年、Goodnowの“Municipal Government”（『市政論』）を訳し、その延長線上のものとして明治41年、『応用市政論』を著わした。その序にあるように都市経営という立場から論じている。その第8章に「公園」を充て、公園の必要性・公園の設計法・公園の維持費・小公園の必要性・小児専用の運動場・諸外国の例（米独仏等々）最後に日本における公園について、東京市の公園・公園の収入・公園設計と小運動場、終りに日比谷公園について論及している。公園を「都市生活の必要条件」「或人の言へるが如く公園は肺臓の如きものである。」という点、片山の公園論と程同じである。安部の公園論中注目すべきは、具体的な公園の設計法、維持法を述べているところである。

故に公園の設計を為す者は一の便利法を案出した。即ち公園地として指定せられたる土地の一部分を売却し、基金を以て種々なる設備をなすのである。公園は必ずしも其面積の広大なるを要しない。若し其土地の二割若くは三割を売却したいとて公園其物の性質を損することはない。⁸⁾（P. 224—225）

鬱蒼たる森林は常に公園の風致を添ゆるのみならず、時々これを輪伐して善良なる木材を売却することが出来る。其枝を切り払ふが如き或は枯木を切り倒すが如き何れも多少の収入とならざるものはない。……其他公園の財源となるべきものは喫茶店、料理店等の營業人に土地を貸与して得る所の地代である。若し亦公園中に湖水などあらば相当の税を課して或營業人に貨ボート業を営ましむるもよい。亦公園の要所々々に広告揭示所を設け相当の広告料を徴してこれを私人の用に供するも一方法である。⁹⁾（P. 226—227）

また、彼は小公園についての必要性を強調する。「若し公園が都市生活の必要條件であるとすれば一局部に大公園を設くるよりも全市に亘りて小公園を多く備ふるが善い。」

彼らに共通しているのは、欧米留学の経験から近代都市のモデルとして欧米諸都市を把らえている点にある。

またその記述は「都市改良」に重点が置かれる。彼らの公園論はその都市衛生の点に傾き、欧米を規範として啓蒙的である。欧米に比較して、国内の遅れを例えば人口と対比して公園の面積の少なさを強調する。公園問題は都市の衛生問題を中心に扱われる。

3. 明治社会主義者達の日比谷公園観

日比谷公園は明治36年6月1日に仮開園式をあげた。この前後各紙は日比谷公園についての記事を多く掲載している。明治34年5月12日の『時事新報』には「日比谷公園設計成る……其設計によれば日比谷原を二分し、洋風和風の二遊園を作り、四季の花卉を募集し、假山、仮池、音楽堂等設備至らざるなし……」とある。また開園の翌日6月2日『日本』は「昔の練習場に青葉繁りて日比谷公園開園式を挙ぐ」の見出しで報じている。この日比谷公園に対して、この時期彼らはどう評価したであろうか。

堺利彦は『万朝報』（M. 36. 6. 9）に「日比谷公園所感」という論説を寄せている。「日比谷公園は実に公園らしき公園なり。」という書き出しでも分かるように、概して評価している。ようやく、社寺境内地ではない西歐的公園の出現を見たわけである。彼は今までの公園について「道路のごとき公園、山林のごとき公園、官有物のごとき公園、興業場のごとき公園、神社仏閣の付属地のごとき公園は、決して真に市民悠遊の所となすに足らざるなり。」と言いきっている。一般に彼らの理想とした公園は、パリのブローニュ、ヴァンサンヌ公園であり、ロンドンのハイダーク、セントジューズパークである。日比谷公園についての賞賛の辞はさらににつづく。

東京市民は新たに市の中央に一大庭園を得て、富みたるも貧しきも、老いたるも、若きも、みなこのごろの日夜を楽しく百白く過ごしたるなり。日比谷公園に遊んでかくのごとく瞑想する時、吾人は実に言うべからざる満足を感じるなり。⁹⁾

彼は『平民新聞』の筆禍に遇い、明治37年4月末から6月末まで巢鴨監獄に入る。出所後「獄中の偶吟」として『週間平民新聞』第36号（M. 37. 7. 17.）に「別荘と公園」なる散文詩を書いている。これは第一面に掲載された。彼はよほど「公園」が気に入っていたらしい。

（前略）……門高く、塀長し。盛装の人、馬車の人、競いて入り来る大邸宅。其の裏庭の生籬の、外面に立てる一少女、愁然として嘆ずらく。ああこの風景、美しや、善き公園にしてしがな。知るも知らぬも打連れて、皆共に来て遊ぶべく。¹⁰⁾

『社会主義』第7年第14号（M. 36. 6. 18）に「日比谷公園」と題した短評がある。筆者はブラブラ生とあり誰であるかは不明である。日比谷公園の設計については「我意を得たり」と堺利彦同様賛同してはいるが、そ

の公園の周囲にカキとか門があることについては異議を唱えている。また園内に4, 5の水水店、菓子店の必要であることを述べ、終りに帝国ホテルについて一言いつている。「モ—つ正門が帝国ホテルに向て居るのが癪だった、噫帝国ホテル！、余はコレを思ふ毎に無限の憎悪心を起すのである！」¹¹⁾ 位置的には正に日比谷公園は帝国ホテルあるいは官庁建物の前庭の感がある。もともとここは官庁街計画のされていた所である。

西川光次郎は『週刊平民新聞』第35号(M. 37. 7. 10)に「公園の退化」と題する論評を載せている。その冒頭に日比谷公園がでてくる。

日比谷公園の周囲鉄柵あると(此の鉄柵を見ると公園にまで私有的觀念が附着せるが如く思はれて異様の感なき能はず)又帝国ホテル、華族会館、裁判所等を始めとして氣に喰はぬ建物の多くあるとは吾人をして初めより此の公園に対して多くの好意を有せしめざりしが、而かも尚公園は公園なり、吾人と雖も公園の増加を東京市民の為に慶賀せずして止む能はざりき

然るに此の公園出来て間もなく、去二月十九日のことにてありし、東京市民中の少数者が日進春日歓迎の爲めなりと称して此の公園を占領し、午後一時より七時まで一切公衆の公園に入るを許さざりし、吾人は其の時斯く思へり、市民の一部分が時に公園の一部を集合の為に占領するはよし、されども少数者が一時とは云へ公園の全部を占領するは以ての外なり、斯くの如きを許さば公園は最早公園にあらずと、之れ日比谷公園退化の第一歩なり¹²⁾

公園を私的に占領するはもつての外、西川光次郎は公園に公共性を見ている。さらに退化の第二歩として、公園の中央に料理屋ができこれを役人官吏、新聞記者が私的に利用することをあげている。

日本的公園であり、ある意味で庶民性豊かな公園、浅草公園について、『労働世界』第6年第22号(M. 35. 11. 23)に、木下尚江が浅草で行なった社会主義協会での演説がある。日比谷公園と対比するため取り上げてみる。「浅草の社会的觀察」と題してその中の「社会的大問題」の中で浅草公園の存在を批判している。

……更に觀世音を看るも、これ亦觀世音の功德が靈驗なる訳ではなく、其の公園があるからなので、此の公園には幾多の腐敗墮落罪惡が行なはるゝことのそれがアラタくなるからで有名である、而して浅草区民は、此の二者(吉原と浅草公園)に大恩恵を受けて居るもので、此の区民は皆な之れに依つて其が生活をして居るものである、ア、何故に之れを浅草に置くか、斯かる醜界を何故に東京に置くか、否な何故に之れを日本に置くか、是れ實に社会的大問題である。¹³⁾

明治社会主義者達は日比谷公園を概して来るべき公園として一度は賞賛する。かつての日本的公園浅草を醜惡

なものとみなし、公園のあるべき像を日比谷公園に求める。しかし、日比谷公園の「公共性」を一方で危惧している。

4. 社会主義と公園

日本初の総合誌といわれる『太陽』第3巻第17号(M. 30. 8. 20)に高知県出身、自由党の小松三省衆議院議員は「社会主義の存在」と題する論説を書いている。彼は冒頭で当時の理解として社会主義を要約してこう書いている。

或る団聚体の発意と主働とを個々人々自由行動を或る程度の中に検束して共同の福祉を増進発達せしめんとする社会制度を指示するに外ならず……

続いて彼は国家も自ら制度法律において適切に社会主義を実行していると述べている。

……国家の事業中少なくとも上掲の事業(鉄道・電話、道路、橋梁、学校、水道、公共の利益に関して創設経営せらるる所の事業)に関しては明らかに社会主義の実行せられつゝあるを知るべし、而して此の社会主義なる者は之を行ふて其害あるを見ずして却て其の利あるを見るべし。鉄道、幣制乃至水道学校の如きは甚だ看取し易き所の社会主義なり、更らに看取し易からざるの事業に至りても政府事業の中に於て続々として社会主義の行はれつゝあるを見るべし。

今日でいう公益事業を社会主義の顕在化したものと見ている。社会主義の理解として、都市公共事業を社会主義の応用と考えていたことは明らかである。

片山潜もまた同様な見方をしている。欧米諸都市は社会主義を応用し、市政に反映させている。この社会主義の公益的な面を「上野、浅草、芝公園」の住民一般の利益にたとえる。彼は『労働世界』第22号(M. 35. 11. 23)の「東京市と社会主義」(これは第23, 24号と連載される)なる論文の中で次のように述べている。

……今や欧米諸州の諸都市は最新の文明を利用し最進の政治思想を活動せしめ以て社会主義を応用しつゝあり吾人は斯る実験をロンドン市、グラスゴー市、巴里及伯林の諸都市に於て見る者なり、今や都市社会主義の名称は欧米諸都市の市政に勢力を得来れるなり。……社会主義は社会を支配する公平なる万民に満足を与へんとする原則なり、之を一村に応用するか村民は皆公平に其村の与ふる幸福と村民の一致協同より生ずる利福を蒙るべし、之を一都市に行へば全都の住民は同じく利福を受くべし、隅田河岸の觀桜の快樂と上野、浅草、芝公園の利益は都下百五十万の人民が同一様に受くるを得るが如く……¹⁴⁾

西川光次郎は前記「公園の退化」の(3)結論でこう述べている。

……吾人は読者諸君が以上の事実よりして、今の如く

少数者に権力ある会社に於ては公有財産と雖も公共の爲めよりは少数者の爲に濫用せらるゝこと多く、公有公共と云ふ名の全く詐欺的に用ひらるゝことすら少なからざるを思ひ、而して社会主義者が一方に土地資本の公有を唱へ、他方に於ては民政の発達、普通選挙の実行を叫びつゝある所以を解すること、更に一層深からんことを望む¹²⁾

彼はこの2ヶ月後『土地国有論』を著わすが、ここでは公園の退化は、公有公共の名のもとに公園が私的に使われることを一例に上げ、社会主義が土地の公有をいうのはこういう理由、つまり私的に使われることをなくすることにありと。

社会主義とは何かということを広く端的に大衆に知らしめるには、もう少し身近でわかり易い例を上げる必要があった。明治40年10月15日の『大阪平民新聞』の号外に「公園問答」なる興味ある記事がある。甲と乙の二人の会話形式になっており、公園を社会主義の表出したものとしている。少し長くなるが以下引用する。

公園問答、甲「何時見ても君、上野公園は実にいいな。乙「全くだ、暫くあのロハ台にでも腰掛けようか。甲「ロハ台もいゝが君、僕ァ此位の別荘が欲しくなった。乙「公園を別荘に仕様と云のか。甲「ウン、是が僕の別荘であって見たまへ。そりゃいいぞ。乙「君はいゝだろうが外の人が困る。甲「友達甲斐に君なんぞは呼んで御馳走をしてやるよ。乙「僕一人くらい御馳走したって外の大勢の人を何うするか。甲「そんな他人の事まで僕が知るもんか。乙「君は実に個人主義だな。君が此公園を欲しいと云ふなら、外の人にも矢張欲しいと云ふよ。甲「欲しければ誰でも取るさ。乙「じゃ喧嘩になるね、喧嘩の上で君が取ると極って居れば喧嘩もいゝだろうが、外の人が取っていったら君だって詰らないだろう。甲「そりゃ仕方が無いさ。乙「だからさ、善くマア考へて見玉へ。誰か一人が此公園を別荘にすれば、何千人何万人が遊び處を失ってしまふ。甲「そりゃ人に取られるのは無論詰らないさ。乙「だから皆んなの共有で、公園にして置くが善いぢゃないか。甲「ウム… 乙「更に一步を進むればさ、あの向ふに見える岩崎の別荘を……甲「ウン、あれを取って僕のに仕ようか。乙「何も君のに仕なかったって善いぢゃないか。あの塀を取毀つて、不忍池から引続きに大公園にしたら無いだろう。甲「ウム成程、公園を別荘にするのぢゃなくて別荘を公園にするのだね。それが所謂社会主義だね。それなら僕も賛成するよ。¹⁵⁾

この論は非常に平明であり単純である。しかし、プロパガンダの点では大衆に受け入れられる可能性は大であると言える。単純であることがプロパガンダの要である。公園というものが社会主義の具現化したものであり、こ

こでは、公園は「皆んなの共有」を意味し、「別荘を公園にする」ことなど具体的に社会主義の例を上げている。

『経国美談』の著者矢野文雄は鷗外により批判されたが、彼の著書『新社会』の冒頭は「公園の邂逅」で始まる。「邂逅」とは思いがけなく出合うことである。ここでの公園は新社会の入口であり、パラダイスの景色として描写されている。彼は来るべき新しい社会のイメージとして公園との出合いで象徴的に表現したわけである。社会主義者達が抱く新しい「公園」のイメージは、旧社会にはなかったものに対する憧憬の対象となった。「楽園」では非現実的であり空想的であるが、「公園」ということばは「楽園」と比較すれば現実的である。まだ不明瞭なイメージである点で「公園」は半現実的半空想的イメージを抱かせるのに好都合であり、その故社会主義者達のプロパガンダになりえた。

5. おわりに 一公共性と公園一

近代になり、わが国は今までに国内に存在しなかった欧米の文物、制度を輸入した。新しい言葉、新しい概念が漢語によって造語翻訳された。「公園」もまたその一つである。公園の「公」は今日では公共性に通ずるものであるが、この時期の「公」は国家ないしは政府に比重が置かれる。ちなみに当時の新聞から「公」の付く言葉を掲げてみる。「公布、公開、公益、公園、公会、公件、公共(心)、公債、公務、公行、公告、公裁、公使、公私、公爵、公称、公商、公事、公正、公選、公然、公道、公平、公報、公論、公用等々多数にのぼる。¹⁶⁾ もう一つの例として法令全書からその例を掲げると(慶応3年—明治10年代)、公有、公売、公判、公認、公解、公学、公用、公訴、公務、公納、公課、公館、公権、公布、公文、公益、公園、公庭、公延、公債、公罪等々。これも頻出する。このように「公」は社会的に広くばらまかれ、「公論、公道」に代表される政治的原理とともに社会的理念をつくり上げた。¹⁷⁾ 公園はこの観念的な「公」概念を具現した一例ととらえることができる。「公園」は「宮園」と「私園」との中間に位置するものであり、一度与えられた「公園」は日常的には大衆社会の中に馴化する。社会主義者達は「公園」の「公共性」を社会主義の枠の中で把握している。小松三省の社会主義の定義をふりかえれば、「公共性」を介入させることにより、より明確に彼の社会主義の理解が可能である。

『大阪平民新聞』明治40年7月の第3.4.5号に「奇怪なる公園」と題する論説が連載された。これは大阪の浜寺公園内に、私人の別荘が建てられることに対する抗議文である。この論旨は、公園の公共性を問題にして展開されている。「……茶店と云う名義で百有余万の大阪府民を瞞着し、公園地の真中に思ひ思ひに別荘を建て並べ、万民平等の遊覧所、日本人民総体の先祖から譲って

貰った此景色を金のあるに任せて我物顔に占領し、多数平民の娯楽を奪ふと云ふ悪事……」¹⁸⁾と攻撃し、「さて公園は何の為に設けたものであるか、言ふ迄もない大多数の平民、中等以下の社会、貧乏な人々即ち吾等の為に設けたもので、金持や紳士共には別に用の無い筈である……」¹⁸⁾と「公園の真目的」として述べている。

この記事は「公園」の「公共性」が上と下からのダイナミズムによってつくられるプロセスの一例である。西欧近代においては市民革命を経験し、市民社会を形成し、そこは国家と諸個人との緩衝地帯であり「公共性」の領域である。日本では「公共性」は「公」により急速な近代化の中で与えられたものである。

明治社会主義者達は「公共性」を社会主義の中で把握し、またその意味で限界をもったといえる。しかし、この近代的政治的社会的理念である「公共性」を「公園」の中に見い出した点は先見的である。今日、主義を超越した社会的イデオロギーとして「公共性」は唯一国民的コンセンサスを得る理念である。公園もまた「公共性」を持つことにより市民権を得る。

引用ならびに参考文献

1) 吉田精一編：森鷗外研究，49—56，築摩書房，1962

Summary : Since modern ages (Meiji era), Japan had introduced Western cultures and institutions, which including public parks. In the process of acclimatizing public parks to Japan, which are products of Western modern societies, the author deals with the concept of them for Japanese socialists in Meiji era from viewpoints of (1) Municipal problems, (2) Socialism and (3) Publicity (public interests).

(1) The urban sanitation was one of the most important municipal problems. Ôgai Mori, Sen Katayama and Isoo Abe commented it in their own works. For instance, Katayama published "Municipal Socialism" in 1903 and wrote in it, "Public parks are places of amusement for the poor and safety valves of the city. Existence of them closely affected to the public sanitation for the citizens..."

(2) THE OSAKA HEIMINSHIMBUN (Oct. 15 in 1907), A Socialist Semi-Monthly, put an interesting article, A dialogue of public parks, which briefly showed that establishing public parks meant Socialism. The concept of public parks was new one in modern Japan and coming up to the gate of "New Society" as Fumio Yano said symbolically.

(3) They grasped the concept of public parks in the process of understanding Publicity has a bipolarity, one coming up to the government and the other to the public.

The opening ceremony of Hibiya Park was held June 1st in 1903. Toshihiko Sakai said, "The Hibiya Park met my wish." The Japanese socialists generally evaluated it as regards the Western style on one hand and the other felt discontented it in respect of Publicity.

They grasped public parks as a manifestation of socialism. The process of Japanese modernization yielded municipal problems, which inevitably created the domain of Publicity. The public parks were the incarnation of it. They understood that municipal problems would be able to solve by socialism (municipal socialism) and that public parks were facilities of the city.

(『文学』, 1936. 6)

2) 鷗外全集第25巻, 418 — 436, 岩波書店, 1973

3) 鷗外全集第31巻, 575, 1974

4) 労働運動史研究会編：明治社会主義史料集補遺 5, 181, 明治文献資料刊行会, 1963

5) 片山潜：英国今日之社会，警醒社書店，1897

6) 近代日本文化叢書『都市社会主義・我社会主義』，実業之日本社，1949

7) 岸本英太郎：上掲史料集補遺 5 解説，5

8) 安部磯雄：応用市政論，日高有倫堂，1908

9) 堺利彦全集第1巻，273，法律文化社，1971

10) 上掲史料集別冊 4，291，1962

11) 上掲史料集補遺 5，346

12) 上掲史料集別冊 4，285

13) 上掲史料集補遺 4，801，1963

14) 上掲史料集補遺 4，373

15) 上掲史料集第5集，373，1962

16) 国立国語研究所：国立国語研究所報告15「明治初期の新聞の用語」，1959

17) 林屋辰三郎他編，変革と情報，238 — 241，中央公論，1971

18) 上掲史料集第5集，40